

## 論 説

# 「“静かさ”の時・空間」の人間形成的意義 —— 現代教育へのアンティ・テーゼ ——

齊藤 育子

## ＜要 旨＞

人が本当に「人間」であること、真の人間になることにとって本質的な要件は、内奥の醇化・心の成熟・魂の浄化に外ならない。換言すれば、「内面へのケア」「魂への配慮・世話」が十全に行われてこそ、初めて真の教育は成立する。そのためには、若い人々の傍らに常に内的に成熟した立派な人物が厳然と介在していなければならない。すなわち、人知を遙かに超えた絶対の超越者にかけて、次世代の「まっとう」な成長・発達をひたすらに祈念しつつ、彼らの心魂に親しく寄り添いながら、その心身を神意に副って善く陶冶すべく日夜献身する「祈りの人」が、身近かに「モデル」として居てくれなくてはならない。そのような「実践的な祈り」を人生の基軸として、真摯に生き抜いている敬虔な「人格」を絶えず目のあたりにする時、次世代の若人たちは必ずや、眼前の“生きた理想”を「お手本」（*exemplar*）と観じ、自発的にその「まねび」（*imitatio*）に励むようになるであろう。本稿では、わが国の典型的な“クリスチャン=教師”であった上代 淑が実践した「魂への配慮・世話」の具体相を通じて、その本来的“サイレント・アワー”（“静かさ”の時・空間）としての人間形成的意義について論考した。それは究極的には、現代教育への本質的批判をも意図するものである。

キーワード：サイレント・アワー（“静かさ”の時・空間）、魂への配慮・世話、“クリスチャン=教師”上代 淑校長、日常の示範、現代教育批判

## 1. 問題意識と予備的考察——“サイレント・アワー”の本旨をめぐって

最初にお断りしておきたいが、ここに謂う“静かさ”の時・空間とは、一言で表現すれば、人間独特の「祈り」<sup>(1)</sup>の時・空間ないし、「黙想」のための時・空間のことである。じっさい現在も、各種の宗教施設や宗教立の諸学校では、様々な形で「祈り」や「黙想」のための時間や場所が設定され、実施されているのは周知の通りである。

けれども、それは——残念なことながら——今日、余りにも形式に流れ、機械的に行われている場合が多いのではなからうか。今や、本来の意味での“Silent Hour”の本旨や“Chapel Hour”の本質からは大きく懸け隔たった、形式的な慣行ないし機械的に取り行われる行事に墮してしまっていないだろうか。過去25

年余り、キリスト教主義の複数大学に職を奉じ、また同系列の大学での学校礼拝にも与る機会を得た者として、こうした現状を深く憂うものである。——これが、今回あえて本稿を投じる根本動機であることを、予め表明した上で論を進めることにしよう。

改めて断るまでもなく、ここに謂う「祈り」の場と時としての“サイレント・アワー”とは、決して単なる特定の場所や物理的意味での環境条件ではなく、あくまでも人間的な内面的環境（*human inner-environment*）を指している。つまり人間ならではの、内的沈潜による内面陶冶のための特別な時・空間を意味しているのである。それと云うのも、人が本当に「人間」であること、真の人間になることにとって本質的な要件は、内奥の醇化・成熟に外ならないからである。しかも、その「サイレント・アワー」を本来の趣旨に即した、“静かな”内面凝視・内面沈潜の時・

空間たらしめるには、その決定的要件として、そこには一廉の「祈りの人」、「実践的に祈る人」が是非とも身近に介在していなければならない。すなわち、人知を遙かに超えた絶対の超越者にかけて、次世代の「まっとう」な生育・成長をひたすら祈念しつつ、彼らの心魂に親しく寄り添い、その心身を神意に副って育成・陶冶すべく日夜献身するような人物が、常々身近な「モデル」として居てくれないといけないのである。そのような「実践的な祈り」<sup>(2)</sup>を自ら人生の基軸として生き抜いている敬虔かつ真摯な「人格」を目のあたりにする時、必ずや後続世代の若人たちは、眼前の“生きた理想”を「お手本」(exemplar)と観じ、憧れの心をもって自発的にその「まねび」(imitatio)に励むようになるであろう。これこそは、人間形成の最も根源的・本質的な要訣ではあるまいか。

そのような勝義の人間形成を実践した教育史上に名高い「教育的天才たち」(pädagogische Genien)を想起するならば、例えばスイスはシュタンツでの孤児たちの救済と教育に挺身したヨハン・ハインリッヒ・ベスタロッツィーや、子どもたちがそれぞれに自らの命の花を開かせる“園”としての「幼稚園」(Kindergarten)を創始したフリードリッヒ・フレーベル、あるいは19世紀英国でパブリック・スクールを「内的に面目一新」させたトマス・アーノルド<sup>(3)</sup>、あるいは米国初の女子大学マウント・ホリヨークを創設し、そこから多数の優れた宣教師や学校教師を海外にも送り出したメアリー・ライオン<sup>(4)</sup>らの、世界的に名高い人々を直ちに挙げ得るであろう。わが国について見ても、例えば同志社を創設して日本のキリスト教界や教育界における傑出したリーダーを輩出した新島 襄や、不良化した青少年の感化施設「家庭学校」を創設し、教師夫妻が両親代わりとなるユニークな労作教育による感化活動を通じて、秀でた社会事業家を世に送り出した留岡幸助等々の名が容易に思い浮かぶであろう。こうした“卓抜のクリスチャンであると同時に出色の教師であった”「天才たち」と比べても、本質的に決して引けをとらない典型的な女性“クリスチャン=教師”として、これまで全国的には必ずしも有名でないけれど、勝義の「祈りの人」として常に女学生ひとりびとりの心魂に寄り添いつつ生涯を捧げきった教育実践家が、われわれの身近な処で然程遠くない過去に、実在して居られたのは厳たる事実である。すなわち、本稿で後に具に取りあげる上代 淑その人である。

取りあえず以上の前置きをした上で、先ずここに謂う“静かさ”の時・空間とは何か?——という問題に更めて立ち戻るとしよう。伝統的な用語で表現するならば、それは、自他の「内面へのケア」を行うための時・空間とも云えようし、あるいは「内なる“魂”を善く導く」ための特別な機会とも云い換えることが可能であろう。因みに、人間は「魂への配慮・世話(therapeia psychēs)」<sup>(5)</sup>をすることで、「善く生きること(to eu zēn)」<sup>(6)</sup>こそ肝腎要めであると力説したのが、古代ギリシャのソクラテスであったことは周知のとおりである。また漢字について見れば、「孝」の字の元来の語義は、年齢や地位とは一切無関係に、相手のお人(person)に対して、心をこめ大事にかけて善行を尽くすという意味であった。そうして見れば、所謂“サイレント・アワー”とは、正しく自己ならびに他者の「内面への“孝行”」ないし「魂への配慮」を十全に果たすための、重要な機会という意味を有していると云えよう。つまり、人間存在にあって、その最も自分自身である領域とも呼びうる独特の内面世界としての「魂」の存在に先ずは気づかせ、次いで、その目覚めた魂を更なる高みへと養い育て、自ずとそれを陶冶する努力へと促しつつ、やがてそれを会得させるに至る一連の「内面陶冶」の機会を提供するのが、即ち「サイレント・アワー」の本来的趣旨であると云ってよからう。

では、このような人間の最たる特徴である内面性の目覚めから始まる、一連の内的活動すべてが属する世界とは、一体どのような世界なのであろうか。カントの用語を借りれば、それは普通の可視的な「現象界」(Phänomenon)とは全く別の、遙かに高尚な不可視的次元の「本体界」(Noumenon)が存在することに気づき、その新たな覚醒と共に初めて開かれてくる絶対的・無条件的な、人間固有の「内的別世界」としての「叡智界」(intelligible Welt)がそれであると云ってよいであろう。そこでの最も中核的な位置を占めるのは、人間性の最高の表現である道徳性であり、従ってそこでは、道徳的価値ないし理想としての「善」を志向してやまない「良心」(conscience, Gewissen)の存在が、換言すれば、カントの所謂「定言命法(kategorischer Imperativ)」に完全に服するような、人間ならではの純粋な「魂」(psychē)の存在が必然的に要請されることになる。<sup>(7)</sup>

こうして見れば、ソクラテスの説く「魂への配慮」とは、人間の最も高尚な部分に対する「善き世話」のことであり、人間存在における道徳的価値や善の理念に直接関わるような「実践的・実存的」な智慧ないし

賢慮 (sophia, phronēsis) を育み養うことに外ならない。してみれば、十全な「内面への配慮」ないし「魂の善き世話」を遂行するには、絶対的・無条件的存在としての超越者を究極的には予想ないし要請せざるを得ず、翻ってそれは有限存在としての人間に許される「祈り」の問題へと収斂せざるを得なくなるであろう。つまり、ソクラテス的な「魂を善く世話をする」ことの核心部分と、キリスト教的な実践的「祈り」の中核的内実との間には、人間固有の道德性や善の理念をめぐる実質上の接合ないし交叉の「場」が開かれると見てよいであろう<sup>(8)</sup>。これを思想史的連関として言い換えるならば、古代ギリシャ的な——最終的目的ないし究極の意味としての——「テロス」(telos) 概念と、キリスト教的な——絶対的・無条件的な超越者としての——「神」(Deus) 観念とが、ヘレニズム世界での歴史過程の中で習合 (configure) したと見てよからう。よりキリスト教的立場に即して云えば、神の絶対の愛を感謝とともに堅く信じ、その御加護をひたすら念じつつ、正に神意に外ならぬ善の実現を、この現実世界の中で一步步と達成してゆくため、孜孜として「日常生活の聖別化」(Verheiligung des Alltags; <ブーバー>) を期して、絶えず眼前の一人々々に対して「隣人愛」の実践に挺身すること、——これこそが人間として許される「祈り」の実践的・実質的内容となる。このような「祈り」の実践の意味での「隣人愛」を躬行する人物は、云うまでもなく同時に「魂の善き配慮者」であるに相違なく、逆に「魂」を善く世話する人は同時に「祈りの人」と称されるに相応しい人物であることも、これまた多言を弄するまでもないであろう。要するに、このような古代いらいの人類の長い精神的・思想的営みの総体的な文脈の中で、今なお我々は「魂」という言葉に、常に道德的あるいは宗教的な意味を感じとるのであって、この言葉が何がかしかキリスト教的な響きを帯びて諒解される所以も、正にこの点に存するであろう。こうしてみれば、魂を大事にかけ、魂を善く導く実践としての「教育」は、やがて神に仕えることにも相通ずることとなる。何となれば、「魂」こそは人間固有の最も崇高・神聖な部分であって、キリスト者の道德的实践ないし「隣人愛」の実践における正に主体そのものに外ならないからである。

さて、以上のような一般的考察を踏まえ、次節以下では先ず、年若い女学生たち一人々々の心に真摯に寄り添いつつ、彼女らの「魂」を大事にかけて守り・育て・養うことに日夜腐心した典型的な“クリスチャン

=教師”<sup>(9)</sup> として、上代 淑なる人物の生涯かけた信仰と教育の根本特徴について解釈学的・人間学的視点から論究することを通じ、やがて「静かさ」の時・空間」がもつ真の「教育(陶冶)」の意味について考察してみたい。

## 2. “クリスチャン=教師”上代 淑における「魂への配慮」の実相

上代 淑(1871-1959)は、岡山にある山陽高等女学校<sup>(10)</sup>(現 山陽学園)で、明治・大正・昭和を通じて65年間教師として奉職し、内およそ51年もの長きに亘って校長の重責を担った人物である。実は彼女について、筆者は過去30年近く研究対象としてきたが、その経歴に関しては固よりのこと、教師としてもクリスチャンとしても如何に卓越した人物であったかを証示する、幾多エピソードについて既に学会誌等を通じて発表してきている<sup>(11)</sup>。ここでは、全国的には必ずしも高名でなかった上代 淑が、如何に優れた教育者であったかを証する印象深い諸事実をめぐり、暫く集中的に考察を重ねておきたい。

筆者が幸いにも直接インタビューでき、それ以来折りにふれて深い交わりをもたせて頂いた上代の教え子の一人、小林恒子氏の生き方そのものにも直接に反映されている、“クリスチャン=教師”上代の根本的陶冶力についてである。小林氏は、戦後満州から引き上げたのち病気で夫を亡くして厳しい自活の道を生き抜かれたが、やがて老齢のため一人暮らしが叶わなくなってからは、親交の深かった牧師の薦めにより、京都のバプテスト系特別養護老人ホームに、持ち物すべてを処分した上で入所されたのであった。しかし、上代 淑の訓えが凝縮された「日めくり」<sup>(12)</sup>だけは、決して手許から放すことはなかった。生前、彼女はしばしば次のように述懐しておられた。「上代先生の御教えを受けました者として、なかなか実行できませんものの、何時も心の中にはその御言葉が忘れられず働いて居りまして、感謝でございます。良き師に巡り会えてほんとうに仕合わせだったとつくづく感謝しております」<sup>(13)</sup>と。そして入居したホームでは、自分にできる仕事を見つけては労を惜しまず立ち働き、可能な限り教会での土曜奉仕も引き受け、日曜日には欠かさず礼拝を守った。それを「私の生き甲斐」「私の楽しみ」と語り、上代の「神と人への無私の奉仕」という訓えを最期まで実践したのであった。また、金銭的に困窮している

わけではないのだから、より整った施設に移るよう再三牧師が勧めたにも拘わらず、恩師上代を文字通り手本にした彼女の質素儉約の暮らしぶりは、生涯一貫して渝ることなく、最後には少なからぬ額の金子を全て母校山陽学園の同窓会に寄付して、みごと天上の人となられたのである。上代 淑を終生変わらず敬愛しつづけ、彼女に訓えを受けたことを矜持とし、心豊かに専ら「隣人愛」の実践に挺身した清廉そのもの生活ぶりは、正に上代の精神を内在化させた「娘」たるに相応しい生き方であり、常に上代の「まねび」に努めた生涯であったと云って間違いない。

この小林氏の事例が端的に象徴するように、若い女学生たちの魂は、日々身近に接する上代校長の崇高かつ情味あふれる人格の魅力に全面的に惹きつけられた。謂わば上代 淑は、彼女らにとって永遠に真実なる人間モデルであった。淑の一挙手一投足から放出される麗しくも抗しがたい迫力にうっとりしながら、その言葉に聴き入り、熱烈に讃嘆し傾倒したといつてよい。彼女に近づく者は誰であれ、その強い求心力ある人格の魅力に引きこまれ至福の思いに充たされた。彼女が向き合い語りかける一人々々の魂の幸福を、心底から願いつつ親身に行われる全き配慮と善意を実感した者は誰であれ、彼女と同じように他者に対して誠を尽くして振舞うことによって、少しでも淑の高潔な人間性に近づこうと心掛けたのであった。——こうした互いの心と心の結びつきを最も大事にする人格的関わりこそが、換言すれば、あくまでも相手の魂に寄り添って、とことん「隣人愛」の実践に腐心することこそが、上代 淑にとっては最大の関心事だったのである。恐らく彼女は日頃から、かのペスタロッツィのシュタンツでの実践と同じように、「まず内を清めよ、さらば外も清かるべし」との聖書の言葉を指針として、女学生たち一人々々の魂のケア・魂の陶冶のために、文字通り粉骨砕身した教育者中の教育者であったと云って間違いあるまい。この不動の信条こそ、彼女が行ったあらゆる活動（pragma）、とりわけ人間形成的・教育的実践の根本動機であったと云えよう。しかも、信仰心篤いキリスト者淑は、それを神から授けられた自ずからなる使命ないし義務と観じ、生きてある限り己れを「教育」ないし「魂の陶冶」に捧げきる覚悟を生涯貫いた人物であった。その決意は、淑が教職の途中で留学したMount Holyoke Collegeを卒業して直ちに帰国して以来、一貫して不変のものであり、彼女の人生を貫く根本姿勢であったと云ってよい。それゆえ彼女の言動の全ては、その陶冶的人格そ

のものから決して切り離し得ないものであり、彼女の信仰上ならびに教育上の「実践」の本質と意義を、端的に証するものに外ならない。換言すれば、上代 淑の信仰と教育の実践は、すべて彼女の生き方そのものの、ないし全人格を驚くほど忠実に反映するものと云って過言でなからう。

上の具体的事例からも直ちに察知されるように、上代 淑の桁外れの人間陶冶力は、教え子自身は固より、その孫子の世代にも深甚の影響を及ぼすほど、力強かつ永続的であったことを次に強調しておかなければならない。<sup>(14)</sup> けれども、その他者の心情への圧倒的な刻印力は、決して一朝一夕になったものではないであろう。長期にわたる学園内外での粒々辛苦の末に、その孜々たる教育実践の積み重ねを通じて、自ずと重い実りとして身についた陶冶力だったに違いない。

それでは、上代が日常の教育活動の中で怠りなく行じた「魂への配慮・世話」は、具体的にどのようなものであったのか。それを具に感得するため、次に印象ぶかいエピソードの幾つかを掲げて、彼女の真情あふれる内面陶冶の実相を見てみたい。

校長上代は、毎年の入学式の席上いつも、緊張して居並ぶ新入生たちに向かって「今日からあなた方は私の娘です」と呼びかけるのが常であった。その言葉どおり正に親になり代わり、一人々々の生徒の心身に寄り添ったのである。教場のみならず寄宿舎でも、上代の配慮は生徒たちの心の奥底にまで行き届いている。ここでは、寄宿舎での実例の幾つかを示しておこう。

上代は51歳で病を得て寄宿舎を離れるまで、山陽高等女学校の寄宿舎で生徒たちと同じ食事を摂り、文字通り起居を共にして暮らしていたが、「自給」制のキリスト教主義の女学校<sup>(15)</sup>として創設された同校の寄宿舎には、独特の生活様式があった。すなわち、「自給」（Self-Support）という明確な建学の精神に則って、生徒たちの輪番によって宿舎内の日常生活が「自給」的に——他者に頼らず自分たち自身の手によって——営まれていたのであった。これは元来、上代が留学・卒業したマウント・ホリヨーク・カレッジ（正確には Mount Holyoke Seminary）における同様の自給的生活様式「家庭モデルの取り決め」（Domestic Arrangements）に範を取った仕来りであった<sup>(16)</sup>。これは、同セミナリー創設者Mary Lyonの発案になるもので、全ての構成員が、あたかも「一つの家庭」であるかのように、キリスト教的精神に基づく強い家族的絆の許で相互に「隣人愛」を実践することを目的とし、一人の例外もなく全員に家庭的共同生活を体験さ

せるため、日常的な各種家事労働を課するものであった。総じてそれは、寄宿生の内面に「高潔な独立心」(noble independence)を啓啓することが眼目とされていたのであった。寮生活の全体を通じて、全生徒の精神的ならびに身体的陶冶が目指されていた。<sup>(17)</sup> ただし注意すべきは、一切を生徒たちに任せていた訳ではなかった点である。マウント・ホリヨークでも山陽高等女学校でも、あらゆる場面で教師たちが直接指導にあたり、教師たち自身が実際に行動の手本を示す「示範」(example)が重視されていた。後者において、その中心となったのは云うまでもなく、上代 淑その人であった。

このような独特の特徴をもった寄宿舎に、ある新入生が入ってきた。彼女は自分の家以外での生活経験をもたない生徒であったが、その年の冬に流行性感冒に罹った時のことを感慨ぶかく語っている。いわゆる「スペイン風邪」の流行下でもあったのであろうか、寄宿舎内がまるで病院のようになるほど次から次へと多くの生徒が寝込んでしまった。その折に上代校長が、夜半に熱の高い生徒たちの氷嚢を一心に入れ替え、彼女たちの回復を祈って不眠に看病してくれた姿を、高熱にうなされながらもハッキリ憶えている、と。しかも彼女は、その後麻疹にも罹って入院するのであるが、その際のこととも併せ想起しながら、満腔の感謝をこめて次のように述懐している。入院の際には、電報で母親に連絡をとって下さったあと、母親が到着するまでの間、校長先生は「お忙しい御用がおありになったことでしょうに、母が来ますまで腰を据えて附添っていて下さいましたのです」<sup>(18)</sup> と。上代校長の温情にみちた看護と深い洞察と優しい配慮とに心底から感謝・感佩した彼女は、4年間の寄宿舎生活を終えたのち、まず上代の創った「山陽家政女塾」に1年半学び、さらに神戸女学院に学んだ末に、「すべての事につき神に祈り、訴え、そしてお任せすることがおできになる」<sup>(19)</sup> 上代先生の許へと再び立ち帰り、心酔してやまない恩師の「まねび」に徹しながら、約8年間母校の教師として勤務したのであった。

戦後、彼女は苦闘の連続の生活を余儀なくされたが、「到底これでは生き抜かれぬ」状態に陥っても、その都度、「どうしても背負いきれない重荷なぞ、神様はお与えにはならない」という上代の常々吐露していた信念にすがって、キリスト者として誠実に生き抜いたのであった。そして後に、上代あてに「先生の娘として、恥ずかしくないように生活するべく努力をしています」<sup>(20)</sup> と近況報告を書き送っている。ここにも、

先の小林恒子氏の場合と同様、若い魂の深みにまで薫陶を受けた人間の生涯にわたる内的「まねび」の真実を、如実に垣間見ることができるであろう。

また、やや別の角度からではあるが、次のような古い思い出を書き残している別の教え子もいる。これまでにない極寒の冬の夜のこと、上代が生徒の身を案じて、自分の炬燵を貸し与えてくれた思い出である。「火の気の無い凍る様な室に、どんなに嬉しかったでしょう。皆嬉しさに、はしゃぎ、口々に饒舌りつゝ蹲って一緒に、先生の愛情に手をかざした」と、はるか以前の出来事に思いを馳せる四十年前の一生徒が「掌に未だ暖かみの残れる思いがいたします」と、そのときの感動をまざまざと語っているのである。この時上代は、厳しい寒さの中で何一つ苦情も言わず勉学の務めを果たした生徒たちを賞めながら、少しでも暖をとらせようと願って、一つしかない炬燵を差し出したにちがいない。その上代校長の温かな配慮は、親許を離れて寄宿舎で暮らす生徒たちの心魂に如何ほどの安らぎをもたらしたことか。自分たちの心身に対する上代先生の親身な心遣いを直ちに、そして存分に感得したに違いない。なればこそ彼女たちは何十年も経た後に、上代校長の深い祈りに基づく篤い慮りに対して感謝を口々に語り合いつつ、こう書き記すのである。「先生の御生命、千代までもと祈る切なる願いの、先生の子等のあること思召されて、只一筋に御自愛あらん事を希うものであります」<sup>(21)</sup> と。あたかも娘が生みの親に相対するかの切実さで、衷心からの感謝の念とともに老齢の恩師の健勝をひたすら念願しているのである。この言葉からも、かつて生徒であった日々を上代先生から受けた濃やかな「心遣い」が、どれほど彼女たちの若い魂を温め・慰め・励まし・育んだか、推して知るべきものがあるであろう。これこそは、上代が常日頃から訴え説いてやまなかった「人の幸福のために生きましよう」という、あの「他者への奉仕」「隣人愛」の生きた手本ないし示範として、若い魂にその精神が生き生きと伝えられていた証左に違いあるまい。

以上によって、寄宿舎で起居を共にするなかで、上代が心を砕いて実践した生徒たちの「内面への配慮」「魂への世話」が、具体的にどのように行われたのか。そして同時に、それはまた人間として「善く生きる」とはどういうことかを、上代自身が身を以て体現して見せた事例でもあった所以も具に了解できたであろう。こうした“クリスチャン=教師”上代 淑における信仰と教育の根本特徴を、多くの卒業生たちは齊しく

感得していたに違いない。上代没後に、恩師を偲んで同校同窓会で編まれた『特集 母校本館建設 上代先生を偲ぶ』の記事には、「七十年の長きに亙り女子教育につくされました先生の御生涯は、深い信仰と信念によって一人々々の魂に触れ合う御教育でありました」<sup>(22)</sup>とか、「篤い御信仰の上に強く立たれた先生のお徳をしのび、もはや肉のからだでは先生にお目にかかれなくなりましたが、私共卒業生の一人一人の心の中に入って、いついつまでも生きて励ましを与えてくださる」<sup>(23)</sup>といった類の、要するに「魂と魂の絆」を中核に据えた上代教育の本質を、的確に捉えた教え子たちの言葉が多量の感慨をもって語られている。とりわけ次の卒業生の言葉は、本稿で力説している上代教育の原質（Urwesen）が、如何なるものであったかを最も包括的に表現しているように思われるので、上代の具体的証例を締め括る意味で末尾に紹介しておきたい。すなわち、「香り高い気品と、火のような教育愛と敬虔な祈りを、深い叡智の微笑に包まれて、魂と魂との結び付きを、誠実と真愛の絆を通して身をもって実践せられた…。先生こそは、私達の魂の支え柱であり、力強い心の灯でありました。…ああ上代先生今はなし！されどその精神は永遠に山陽スピリットの輝やかなしい象徴として、又私達の魂の指針として、限らない激励と鞭撻とをお与え下さるに違いありませんまい」と。<sup>(24)</sup>この純心な文言からは、上代が常日頃から尚び身を以て証行してくれた、他者への「心遣り」、「心と心の取り交わり」「真の人格的交わり」を、曾つての教え子たちが様々な人生経験を経た後になっても、なお「魂と魂の結びつき」「誠実と真愛」として適切に「了解」（Verstehen）し、而もそれを上代亡き後にも、自らの「魂の指針」として守ってゆこうとする確乎たる気概が強く伝わってくるのである。

ここに至れば、上代 淑の教え子たちが、卒業後も何十年に亙って彼女の高邁な人格を敬慕・憧憬し、彼女の言動を常に自らの「お手本」として讃仰しつつ拳々服膺していたことは、最早や疑いを容れないであろう。このように見てくれば、人類における最も「人間ならでは」（humane）の営みたる精神的・霊的な助成としての「魂への配慮」「心魂への世話」こそは、正しく勝義の、あるいは真正の「教育実践」と称せられてよいであろう。人間の最も高尚な部分の「魂」を育成・陶冶する叡智は、このように世代連鎖的に継承されてゆくのであって、実はそのことを通じてのみ、「人間存在」（human being: 人間が真に人間らしく生きて在ること）がはじめて可能となることを、ここに改め

て肝に銘じておくべきであろう。この人間業を遙かに超える程に不可思議で聖なる営みこそ、正に人類固有の「教育」と呼ぶべき営為ではあるまいか。それゆえ、ここに謂う「真正の教育」とは、過去・現在・未来を貫く全人類の「叡智」とも「奥儀」とも称されて然るべきものであろう。何故なら、それは個人を真の人間らしい人間たらしめる決定的な要諦であるのみならず、同時に人類の未来をも保障する絶対的要件でもあるのだから。このように人類存続の基本要件たる「魂への世話」が、世代から世代へと連綿として確実に継承されてきた人類史の厳然たる事実を、今あらためて敬意を以て痛切に再認識するとき、教育に携わる我々は決意も新たに、自らの「教育実践」の貴重この上もない意義と矜持を自覚し直すべきであろう。

### 3. 「静かさ」の時・空間」の再興をめざして ——現代教育への批判的考察

さて、ここで本稿冒頭に掲げた基本的問題意識に立ち還ることにしよう。筆者はそこで「静かさ」の時・空間」とは何を指すのかについて、こう断っておいた。すなわち、自他の「内面へのケア」を行う機会、換言すれば「内なる魂を善く導く」という人間陶冶上格別に重要な意味を担う「時・空間」を謂うのであると。今日キリスト教系の学校で行われている「サイレント・アワー」が、その本来の趣旨に合った「内面へのケア」を目的とする時・空間であるためには、その不可欠の前提条件として、上述の上代 淑にまつわる各エピソードが端的に示しているように、彼女のような本格の「内面への配慮者」が、いつも生徒たちに寄り副う形で、身近かに実在していることが是非とも必要なのである。魂と魂との緊密な絆の中でこそ、はじめて真の人間形成としての「内面の陶冶」が行われ得るからである。人の「内なる魂を善く導く」ことが可能となるのは、日頃から身近な処で被教育者を見守り、その「魂の面倒見」のために「心を砕き、精神を尽くし、思いを致す」教育者（両親はじめ身近な大人や教師たち）の篤実な実践があってこそなのである。

そう考えるなら、今日なにげなく定例的・形式的に行われている「サイレント・アワー」や「チャペル・アワー」が、本来の人間陶冶的役割——すなわち魂への「配慮」ないし内面への「孝行」——を実際に果たし得るためには、何よりも先ず当該学校の教育現場に生きる教師たち自身が、その本来の使命を自覚し直して、

「人間存在」(human being, Menschsein : 人間が人間らしく生きて在ること) への道を歩一歩と進みつつある生徒や学生一人々々に対して、誠を尽くして「魂への配慮・世話」を積み重ねる辛抱づよい実践以外に道はないのである。

それと云うのも、筆者は現代の学校教育について、以下のように批判的に考えているからである。一例を挙げてみよう。中央教育審議会の答申『今後の教員養成・免許制度の在り方について』(2006年)に関して言えば、そこでは一方で、教員に対して「既存知の継承だけでなく未来知を創造できる高い資質能力を有する」ことを請めておきながら、他方では専ら、学校「現場からの要請」との謳い文句の許、「教員としての最小限必要な資質能力」を、すなわち教員としての日常的職務を「支障なく」遂行できる能力を、養成段階から修練するよう「配慮すべき」だと強調している。つまり、いわゆる「実践的指導力の養成」と称する「現場」への安直な適応教育が、教員養成の主たる内容とされているのである。このような「現場」至上主義——目下検討中の6年制教員養成の構想でも顕著に見られる——は、真の教育にとって本質的危険を孕んでいることに注意をしなければならない。

何故なら、現今の「現場」なるものは、過度の官僚統制とも相俟って、直ちに形式的・表面的な「解決」を迫られる性急な「処理」の場と化しているからである。真の教育現場で生じる内面的問題が宿す多義性・重層性などは一切無視され、狭隘な学校文化に特有の常套的な「思考-言語様式」——心理学や精神医学や臨床心理学などの専門用語も含む——に万事が掬め取られ、徒にその形式的・固定的な枠内に万事押し込められて着落となるのが当たり前になっている。だが教師としての基本的資質としては、こうした操作的・末梢的な技能よりも、もっと本質的に豊かな全人的「教養」(humaniora: 「より人間的なるもの」)こそが不可欠である。人類の長大な歴史を通じて「考へられ語られてきた最善のもの」<sup>(25)</sup>に直に触れ、自らの価値観・人間観・人生観・世界観・教育観を、時に応じ折にふれて“批判的に”自己更新してゆく“精神態度”の涵養こそが、教師養成に必須の根幹でなければならない。このような教養ないし基本的素養が身につくことこそ、真の意味での“教育実践”が可能となり、真に“教育現場”の内実が質的に更新・向上されるのではなかろうか。じっさい、先に触れたペスタロッツィやフレーベルやモンテッソーリなど歴史上の優れた「教育的天才」たちは、そのようにして教育の現場を改善・向上

させ、次代の優秀な教育者たちを導き出してきたのであった。

けれども今日、万事につけ効率主義・成果主義が蔓延中で、教育現場でも徒らに形式的目的合理性が支配し、真正の「教養」や精神文化は壊滅に瀕している。否、初めから実は芽生えてすら居なかったというのが実状であろう。この点への深い反省・自覚をも欠いたまま、目前の問題処理に精一杯で「理想論なぞ現場では通用するはずもない」とか「多忙な現場では根本的に熟考する余裕なぞ全くない」等々、といった安易な現状容認主義が蔓延している。

従来の教育界で、小・中・高の学校教育が「現場」と呼ばれ、その特殊性が殊更に強調されて無反省に称揚されてきた独善的慣習は、今や扞拭さず当然ではあるまいか。「実践的」という常套句が、実は学校社会だけの業界用語ないし隠語(jargon)と化している醜態は、厳しく排斥されて然るべきである。というのも、今日不当にも「実践的」という用語で指示されているものの内実は、所謂「現場」で求められている狭い個別的・特殊な目標を効率的に実現するための、明らかに「ハウ・ツー的な合理性」追求に過ぎぬものだからである。しかも、こうした「ハウ・ツー主義」は、同じく近代以降に特徴的な官僚主義と相俟って、公教育としての学校システムにおいても一貫して重用されてきたのである。

こうした学校教育をめぐる本質的に「貧しい」状況は、今日も一向に改まっていないどころか、ますます深刻の度を深めつつある。先般の『教育基本法』の改正(悪)にも端的に現れているように、本来「教育」とは何かを根本から批判的に思索・反省すべき姿勢・態度は全く影を潜め、元来は活き活きした、豊かで深みと温かみと膨らみのある最も人間的な営為であるはずの教育活動を、専ら実定法の枠内に押しこめる一方、学校教育の現場でも、「教育改革」の美名に隠れて「効率的であれ!」とか「実践的であれ!」とかいった浅薄皮相なスローガンのもとで、単純・粗暴とも云うべき「理論-実践」の短絡的な因果関係導入による形式合理主義の授業のみが重視され、真の教育実践を主導すべき「人間」をめぐる根本的・理念的な思索は、今や全く圧殺されるに至っていると云って過言でない。

このような<sup>でいたらく</sup>為体を打開する道はないのだろうか。今や大人の世代が、どのような人生態度(Lebensführung)でもって子どもの養育・教育に当るかによって、次世代の人間形成を決定的に左右することを深刻に認識し直すべき時であろう。先行世代が、自らの「生きる」



姿勢・態度を省みることなしに、次世代の人間形成に成功し得る教育方法など、どだい在り得ようはずもない。肝腎なのは、個々の教育者（教師も含めて）自身の人生や教育に対する全人格的“構え”なのである。人間存在として「善く生きる力」とは、人格全体が「人間として“善く”生成してゆく力動的な働き」そのものを意味するであろう。したがって、現代人における「生きる力」の衰退が云々されるのは、そもそも人格の中核をなすはずの、人間実存の「原質」とも呼ぶべき、善への志向・善へのエネルギーの衰弱に起因するであろう。そして、この全人格的エネルギーは、当該人物それぞれの、独自の「生きる意味」の把握ないし会得にこそ由来する。この一事は、もっと厳粛に真正面から受けとめられなければならない。

幼い嬰兒として生を享けて以来、人は正に「<sup>じんかん</sup>人間的」関係から成る「この世」に受け容れられ、その中で唯一無二の存在として周囲の人々から「愛される」状態をたっぷり経験（味わう）する時、はじめて旺盛な好奇心をもって此の世界を探求し、自ら積極的に関係性を築きつつ成長できるのである。ここを起点として歩みゆく人生の道程で、人は常に自覚的存在として「意味」を求めて模索・格闘し、その喪失と充足との振幅の只中で逞しく成長するのである。そしてその際に、長年にわたり自らの独自の「生きる意味」を追求してきた大人の姿が、身近に見えることが決定的に重要なのである。それが生きた「手本」ないし具体的“モデル”となって、子どもは自身の生きる「意味」を、その都度新たに発見・更新し続けて人間形成を進めてゆくのである。

ところが、現在の家庭教育も学校教育も、こうした子どもの「生きる意味」の発育・成長といった人間形成上の根本問題に対する視座を、残念ながら全く欠いていると云わざるを得ない。具体的一例として、現行の『学習指導要領』に記載されている「道德教育」について若干検討してみよう。そこでは、人間として「善く生きる力」の全体を徒に細分化した所謂「到達目標」なるものが掲げられ、これを概念的に「徳目」として称揚するだけに終わっている。そこでは、万事“正しい”ことが記されているかの体裁がとられているものの、生きた人間の実質を伴わない空疎で偽善的な「作り話」にしか過ぎない代物になっている。これでは到底、本質的な意味での「道德教育」にはなり得ようはずもない。こうした道德教育の形骸化・空疎化は、近代以降の形式的合理主義の直線的「性急さ」の一局面に外ならない。目に見えるもののみが、实在（reality）

であると見なす「実証主義」（Positivism）の世界観に起因する、この世界観・人間観上の本質的“貧困さ”が、教育界をも毒しているとみるべきであろう。そこに在るものは、細分化・矮小化された目標を直接的に達成しようとする短兵急な“生真面目さ”のみである、と云って過言ではなかろう。何となれば、総じて美辞麗句で覆われた一見遺漏なき文章には、生きた人間への温かな眼差しが欠落しており、総花的・網羅的でありながら、本質的に浅薄皮相な人間観が剥き出しで、外ならぬ道德教育にとっては最も致命的な「嘘くささ」が纏わりついているからである。

しかも実践上最も重大な問題は、「正しいことは直ちに実践に移すべし」といった安直・粗笨な「語り口」（論理）が、現代の「人間」をめぐる根本的問題をラデカールに問い直してみる姿勢・態度を、却って妨げ閉ざす方向で作用している点である。というのも、「実践的努力が足りない」との無言の圧力や叱咤激励による所謂「実践」の強調の陰で、実は学校教師をはじめとする教育関係の人々から——かつて上代 淑が実行した如き——「人間として生きる」姿勢・態度について自己吟味を重ね、それを踏まえて次世代の教育に如何に信念をもって関わるべきかを深く自省するだけの、真摯な気概や情熱が今や殆ど喪われてしまっているからである。

このような——1980年代いらいますます深刻化の度を強めつつある——現実の教育界の頹落現象に鑑み、ここで翻って、戦後間もなく「米国教育使節団」の勧告に基づいて施行された、「開放制の教員養成」をめぐる一言触れておきたい。戦前の旧師範系学校における、教員の狭隘な目的養成の弊害に対する反省に基づいたはずの「開放制」教員養成の課程が、今や実質的に殆ど消滅してしまっているからである。将来必ずしも職業的教師にならずとも、社会人や家庭人としての日常生活の中で自然のうちに人間形成的役割を果たさざるを得ない大人世代の責任感や人生観などについて、折りに触れて省みる姿勢・態度を身につけておくことは、今後の日本社会にとっても、延いてはまた人類全体にとっても、極めて重大な意義を有するはずなのである。「より善き」次の時代を迎え得るのは、現在の若者たちが「人間ならではの」基本的資質を有する、真に「成熟した大人」に育つか否かにかかっている。ところが、自らの「人生」そのものから呼びかけられ、問いかけられている人類史的意義と使命を深く自覚し、自ら真摯にそれに応答しつつ生きることの出来る「まっとう」な大人が、現在では決定的に払底



していると云わざるを得ない。別言すれば、真の意味で「プロダクティヴ」(productive: 人間として、より善く創造的・能動的)に生きる志と力を有する“成熟した人格”の育成が、今や根本的な急務でなければならない。つまり、そうした広い視野に立脚した伸びやかな人間形成という“まっとう”な「教育」観が、今日あらためて再興・再生される必要があるのである。

その意味で、否応もなく他者の内面陶冶に何がしか関与せざるを得ない成人が、自らの人生そのものから問いかけられ、呼びかけられている「生きる意味」を自らがどう受けとめ、その信念に基づいて若者たちにどう向き合い、どのような関わりをもつかが、目下の「教職教育」上でも最大の課題であると云ってよからう。なんとすれば、人が正に「人間的」存在として“応答的”に、然るべき「答責性」(Verantwortlichkeit)をもって生きることを通じ、ごく自然のうちに周囲の人々に何らか「善き」形成的影響を及ぼすこと自体——必ずしも意図してでなくとも——既に立派な「教育」に外ならないからである。つまり真の“教育者”とは、決して専門技術をもった職業的教師を謂うのではなく、——ソクラテス以来の——あくまでも、他者の“魂(内面)”への「まっとう」な“配慮(世話)”を日常生活の中で親身に実行・実践(pragma)することの出来る“内なる成熟”をとげた人物のことなのである。それ故に、学校内での目先の目標を直線的に達成するための、些細な「教授技術や教育方法」に照準された狭い「実践的」志向は、このさい抜本的に打破されて然るべきであろう。

つまり、本来の教育、すなわち真の人間形成とは、今日一般に行われているような何らか個別の特殊的・操作的能力を育成したり、何らか特定の専門職業上の知識・技能を伝授したりする、要するに本質的に見れば功利的動機に由来する些末な営為では断じてないはずである。にも拘わらず、現状では「教育」の実態が完全に本末転倒の観を呈している。というのも、今日では人生の目的や意義も、したがって又、教育の本来的な目的や本質的課題についても全く不問に付されたまま、きわめて安直・皮相・狭隘な人生観・教育観だけがはびこっているからである。この現代的風潮は、「クリスチャン=教師」の末席に連なる一人として如何にも嘆かわしいかぎりと言わざるを得ない。

現在日本の学校で一般的に見られる教育の実態を上のように省るとき、改めて宗教立の、別けてもキリスト教主義の学校教育における“魂”を中心に置く人

間形成の重大な意義を、ここで再び認識し直す必要がある。たとえ目下の条件下では直ちに十分とはいかないにしても、怯むことなく真正面から“魂の教育”を建学の精神の中核に据え直す現実的意義は、測りしれないほど重大であろう。それを存立の礎石とも拠点ともして、教師各自が自覚的・个性的に“魂への配慮・世話”を現代的意味において復活させる工夫・努力を、怠りなく積み重ねる意義は極めて深大ではあるまいか。せめてもキリスト教主義学校においては、このような世俗一般の教育とは全く別次元の本来的教育に勇を鼓して立ち戻るべきではあるまいか。今こそ我々は、かのメアリー・ライオンが唱道してやまなかった“気高い独立心”(noble independence)を堅持しつつ、現今の本末転倒の教育的現実(実態)に向かって、乾坤一擲の警鐘を打ち鳴らすためにも、真の「教育」としての「魂の陶冶」を地道に実践躬行すべきではなかろうか。

今回筆者が、わが国の典型的な「クリスチャン=教師」上代 淑を引き合いに出しながら、「教える者」と「教えられる者」との間で交わされる緊密かつ誠実な「心の交わり」「魂の呼応」「魂と魂との連繋・連鎖」を、特に強調すべく敢えて「静かさ」の時・空間」という耳慣れない表題で本稿を投じる所以は、正にこの一点にあることを付言して結びとしたい。

## 註

- (1) 齊藤育子「〈祈り〉の人間形成的意味——上代 淑の教育実践を通して」、岡田渥美編著『人間形成論——教育学の再構築のために』、玉川大学出版、1996年、337-361頁。
- (2) 齊藤育子「理想の〈教師〉像」を求めて——“クリスチャン=教師”上代 淑を手がかりに」、日本キリスト教教育学会『キリスト教教育論集』第18号、2010年、92-95頁 参照。
- (3) 岡田渥美「トマス・アーノルドの学校改革——その理念と実践」、『京都大学教育学部紀要』第30号、(昭和59年)及び同氏「学校に魂をふきこむもの 教育にいのちを与えるもの——ペスタロッツィのばあい」、『παιδεία』、京都大学教育学部 教育学・教育史講座編集・発行、1992年3月を参照。
- (4) 齊藤育子「Mary Lyonの女性〈教育者〉(Educator)の理想像——Mount Holyoke Seminaryの『創設趣意書(1837年5月)』を中心として」、山梨英和短期大学『山

- 梨英和短期大学紀要』第23号、1989年 参照。
- (5) 田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』、29E、30B、『プラトン全集 1』、岩波書店、1980年、84-85頁。
- (6) 田中美知太郎訳『クリトン』、48B、同上書、133頁。
- (7) 高坂正顕『西洋哲学史』、創文社、昭和46年、第47章 参照。
- (8) 人類の精神的・思想的文脈から見た場合には、次のように言えよう。ソクラテスが常日ごろ情熱をこめて説き勧めた「魂への配慮」という表現は、その観念がヘレニズム時代のキニク派やストア派の人々を通じて、次第にキリスト教の一部となっていく結果、今日でも取り分けキリスト教的な響きを帯びて聞こえるのである。だが、それはキリスト教徒が、ソクラテスと同じ様に、魂への善き世話としての「教育」こそが神に対する真の奉仕であり、魂に対する配慮こそが真のパイディアである、との信念を持つに至ったからなのである。
- キリスト教の教説に一貫して認められる教育的で道徳的な、しかも崇高な精神的基調は、ヘレニズム世界のストア学派から獲得されたものであり、その源流をただせば、ソクラテス自身に由来するのである。（“*Paideia — Formung des Griechischen Menschen*”で有名な Werner Wilhelm Jaeger による晩年の労作 “*Early Christianity and Greek Paideia*”, Harvard Univ.Press, 1961、野町啓訳『初期キリスト教とパイディア』、筑摩書房、1964年、特に26、78、121頁を参照。）
- (9) 筆者の提唱する「クリスチャン=教師」なる概念については、本稿注（2）の拙稿において、上代 淑の信仰の特徴に関して原理的考慮を試みている箇所（第3節）を参照していただければ幸いである。
- (10) 創設当初は山陽英和女学校であったが、その後山陽女学校、さらに山陽高等女学校と度々名称変更が行われている。上代自身が最も長い間奉職している時に使われた校名でもあり、また、最も長い間用いられた校名でもあるので、本稿では全て「山陽高等女学校」と表記することとする。
- (11) 齊藤育子「山陽高等女学校の上代 淑（I）——若き日の人間形成過程」、『山梨英和短期大学紀要』第21号、1988年。および、齊藤育子「学校教育におけるクリスチャニティの涵養——上代 淑の場合」、『キリスト教教育論集』第5号、1997年等。
- (12) 齊藤育子「クリスチャン教師 上代 淑の〈日めくり〉——その人間形成的意味」、『キリスト教教育論集』第9号、2001年 参照。
- (13) 小林恒子書簡（2001年7月12日付、筆者宛）
- (14) ある卒業生の子息が、医師として功なり名をとげて古稀の齢に達したのを機に、母の母校たる山陽学園の同窓会に寄付を申し出た際の書信は、この点から見て極めて印象深い。その一節を記しておこう。「亡き母の一生を支えた山陽の誇りの高さを思い その偉大さに敬意を表します。私は その誇りと共に厳しく正しく生きた母を誇りに思っています。それが又私の生き方に大きく影響していますので 深い感謝の念を禁じ得ません。立派な教育というのは受けた人のみでなく、その子弟にまで影響するものと思われます。有り難いことです」（大正5年卒 喜多（旧姓、妹尾）慶氏の長男舒彦氏による平成9年5月16日付の同窓会会長中島智恵子宛書簡）。文中に自ずと迸り出る感動と感謝の念は、上代の薫陶を受けて「厳しく正しく生きた」母親の人生態度が、その子たる寄付者自身の生き方にも多大の影響をもたらした揺るぎなき事実によって由来している。自己の生涯を顧みたとき、母と同様に能く厳正な人生を辿り得たという矜持と共に、そうした生き方ができた自らの人生そのものに対する感謝の念、翻ってそれは、実母に対する感謝のみならず、さらには、その母を教え育ててくれた山陽高等女学校、とりわけその中心たる上代 淑の偉大な薫陶への敬意と感謝に連なっている。
- (15) 齊藤育子「明治20年前後のキリスト教主義女学校における〈自給〉（Self-Support）について——山陽英和女学校の場合」、甲南女子大学大学院文学研究科『教育学論集』第2号、1982年 参照。
- (16) 齊藤育子「明治期〈キリスト教主義女学校〉に対する米国マウント・ホリヨーク・セミナリー出身者の影響——熊本女学校の〈自治自習〉に焦点づけて」、『日本比較教育学会紀要』第10号、1984年、89-95頁 参照。
- (17) 同上、90頁。
- (18) 堀 以曾編『上代先生を語る』、山陽学園同窓会、昭和31年、82頁。
- (19) 同上書、84頁。
- (20) 同上書、85頁。
- (21) 同上書、57頁。
- (22) 山陽学園同窓会『特集 母校本館建設 上代先生を偲ぶ』、昭和35年、111頁。
- (23) 同上書、113頁。
- (24) 同上書、115頁。
- (25) マシュー・アーノルド著、多田英次訳『教養と無秩序』、昭和34年、岩波書店、11頁。

## Some Thoughts Concerning the Educational Significance of the So-called “Silent Hour”, which Originally Ought to be the “Care of Soul (*therapeia psychēs*)”

Ikuko Saito

### <Abstract>

We often have a so-called “Chapel Hour” or “Silent Hour” in Christian schools and universities, in order to offer every member the opportunity to pray to God. This is because, our soul as a human being, must be cultivated through pious self-examination while praying to God in “quiet” time and space as well. In other words, we sincerely “listen to” the voice of God during the prayer. On that occasion, however, it is necessary that a respectable and benevolent person (=educator) should daily stand close to the heart and soul of students.

In this sense, this article is going to consider the various aspects of the “*therapeia psychēs*”, which is nothing but the practice of the Christian ethic of “love for neighbours,” done by Miss Yoshi Kajiro (1871-1959). She was one of the outstanding disciples of Mary Lyon (so-called Lyon's “daughters”) and is deserved of the typical “Christian Teacher” in Japan. As a schoolmaster, Kajiro was compassionate enough to share the same heartache, the same sorrows, and the same joys as others. That is to say, she always kept her own practical code of the “love for neighbours”. All of these came from her peculiarly puritanical characteristic of “practical prayer.” Miss Kajiro was a devout educationist who embodied the spirit of “*therapeia psychēs*”.

As a result, for most students, even several decades after their graduation, Kajiro has always been their object of admiration as well as their exemplar in daily life, so that they have tried hard to behave after Kajiro's high-souled way of life, in spite of various obstacles and difficulties.

In addition, I would like to say that such a hermeneutic-anthropological verification of Kajiro's educational practices would naturally lead us to a keen criticism of contemporary education in Japan.

**Key words:** Silent Hour, care of soul (*therapeia psychēs*), pious self-examinations, schoolmaster Kajiro, the exemplar in daily life, criticism of contemporary education in Japan